

[外国語]

個別最適な授業づくりを実現するための手立て

— Small Talkの中間指導に焦点を当てて —

中山 孝毅*

1 研究の背景

新学習指導要領が示す通り、グローバル化が急速に進む現代において、英語教育の高度化がこれまで以上に求められている。一方で、英語学習に困り感を抱える生徒は多い。『平成29年度英語教育改善のための英語力調査（中学3年生）』（文部科学省、2017）によると、英語の学習が好きでない理由として「英語そのものが嫌い」（34.0%）、「英語のテストで思うような点数がとれない」（15.0%）、「文法が難しい」（13.4%）、「単語のつづりや文字を覚えるのが難しい」（12.7%）、「英語の文を書くのが難しい」（10.0%）、「英語を聞き取るのが難しい」（4.4%）、「英語を読み取るのが難しい」（4.4%）、「英語を話すのが難しい」（2.0%）、「英語の文を声に出して読むのが難しい」（0.9%）、無回答（3.2%）とあり、生徒が抱える課題は多様化していることが分かる。一方、『中学校学習指導要領（平成29年告示）』第1章総則第4の1（4）によると、「生徒が、基礎的・基本的な知識及び技能の習得も含め、学習内容を確実に身に付けることができるよう、生徒や学校の実態に応じ、個別学習やグループ別学習、繰り返し学習、学習内容の習熟の程度に応じた学習、生徒の興味・関心等に応じた課題学習、補充的な学習や発展的な学習などの学習活動を取り入れることや、教師間の協力による指導体制を確保することなど、指導方法や指導体制の工夫改善により、個に応じた指導の充実を図ること。その際、第3の1の（3）に示す情報手段や教材・教具の活用を図ること。」（p.25）とあり、個に応じた指導に向けた指導方法や指導体制の工夫改善の必要性が述べられている。

そうした中、筆者は昨年度まで、生徒の「話すこと [やり取り]」の能力を向上させるために、帯活動の一環として Small Talk を継続的に行ってきた。手順は、①教師のデモンストレーション、②生徒同士の会話、③中間指導、④生徒同士の会話（異なる相手と）である。③の中間指導では、会話の中で言いたかったけれどもうまく言えなかった表現はあるかを全体に問うことで、主に挙手した生徒の困り感に寄り添い、その解決策を全体で考え、共有していた。しかし、②の会話で話される内容はペアによって異なり、分からなかった語彙や文法も個人によって当然異なる。したがって、全体の前で挙手ができない生徒たちについては、彼らの困り感に寄り添うことができずに、2回目の会話をさせていたことになる。その結果、1回目の会話から成長を感じることができず、自己肯定感の低下につながってしまっていた。

このような現状を鑑み、本研究では、様々な課題を抱える生徒が混在するクラスで、主に Small Talk に焦点を当て、個別最適な授業づくりをするための効率的な手立てを模索していくことを考えた。

2 研究課題

(1) 課題

Small Talk の中間指導において、情報機器を利活用したり、適切な助言をしたりすることで「個別最適な学び」が充実し、結果的に質の高い Small Talk につながるか。

(2) 課題設定の理由

令和3年1月26日に中央教育審議会から出された『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）』（以下令和3年答申）によると、外国語の指導を通して育成すべき資質・能力を向上させるためには ICT 環境を最大限活用し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を充実させていくことが重要と述べられている。教科の特性上、ペアやグループによる言語活動、いわゆる「協働的な学び」の時間を設けている英語の授業が多いと推察される。そのような中、令和3年答申の中で危惧されているこ

* 柏崎市立鏡が沖中学校

とは、「協働的な学び」の際に、集団の中に個が埋没してしまうことである。実際に、筆者はこれまでSmall Talkにおいて、英語学習に困り感を抱える生徒が、基礎的・基本的な知識や技能が十分に備わっていないことが理由で、そもそも参加しようとしなかったり、英語を得意とする生徒だけが話し、もう一方の生徒はただ聞いているだけであったりするなどの例を多く見てきた。そこで、情報機器を利活用しながら「個別最適な学び」の充実させることで、英語が苦手な生徒でも知識・技能を定着させ、結果的に生徒全員にとって質の高いSmall Talkにつながると考えた。

3 指導の実際

前述した通り、筆者は昨年度まで、3 学年 3 クラスに対し、帯活動の一環としてSmall Talkを継続的に行ってきた。時間は 2 人による会話を 1 回40秒から 1 分で行い、ルールは、(1) Mistakes are OK! Enjoy making mistakes!, (2)Practice hard! Practice makes perfect!, (3)Help and respect each other!としている（大場, 2024）。手順は、①教師のデモンストレーション、②生徒同士の会話、③中間指導、④生徒同士の会話（異なる相手と）であるが、「個別最適な学び」を充実させるために、今年度から③の際に、情報機器の利用を許可し、翻訳サイトは使わないというルールのもと、各々が分からなかった語彙や文法について調べ、メモをする時間を設けた。それらをもとに、2 回目の会話に移ることで、クラス全員が 1 回目の時よりも自身の成長を感じることができるのではないかと考えた。また、1 回目の会話を聞く中で、教師が全体で共有すべきだと感じたことも指導した。

Small Talkの最後には、振り返りの時間を設け、自分自身が話した内容について振り返ったり、生徒同士でフィードバックをし合ったりする時間を設けた。また、ペアが使った良い語彙や表現はどんどん取り入れるように助言した。こうすることで、次回のSmall Talkに向けて、さらにブラッシュアップしたものを表現しようという意欲につながると考えた（図 1 参照）。

Let's enjoy **Small Talk!**

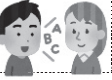
ID _____ Name _____

★Rules★

① Mistakes are OK! Enjoy making mistakes!

② Practice hard! Practice makes perfect!

③ Help and respect each other!



～日々の記録～

月 日 ()	Topic:
MEMO ※言いたかったのに言えなかった単語や表現	
自己評価	
① 失敗を恐れることなく、楽しみながら会話することができた 4・3・2・1	
② 2 回の会話を通して、自分の言いたいことを英語で表現することができた 4・3・2・1	
③ 相手の言うことに相づちを打ったり、質問したりしながら会話することができた 4・3・2・1	
自由記述	

月 日 ()	Topic:
MEMO ※言いたかったのに言えなかった単語や表現	
自己評価	
① 失敗を恐れることなく、楽しみながら会話することができた 4・3・2・1	
② 2 回の会話を通して、自分の言いたいことを英語で表現することができた 4・3・2・1	
③ 相手の言うことに相づちを打ったり、質問したりしながら会話することができた 4・3・2・1	
自由記述	

図 1 Small Talk用の振り返りシート

4 Small Talkの成果と考察

以下に示すものは、1 回目と 2 回目の会話の実際である。

(1) 実践例 1 Topic：夏休みは何をした？（“What did you do during summer vacation?”）

【1 回目】

S1：	What did you do during summer vacation?
S2：	Uh, I want…あ、went to Agano City.
S1：	Oh, Nice. Why？
S2：	I…いとこに会った！
S1：	Really? Uh…what did you do?
S2：	Uh…ジェットコースターに乗った！ It is fun!
S1：	Nice!

1 回目の会話では、S2は語彙が不足しており、夏休みの思い出をうまく英語で表現できていなかった。この後、個人で情報機器を使い、分からなかった単語を調べる時間を設けた。また、情報機器で納得のいくものが調べられなかった際は、教師に聞くよう助言した。

【2回目】

S3 :	What did you do during summer vacation?
S2 :	I went to Agano City.
S3 :	Oh, really? Why?
S2 :	I … saw (メモを見る) cousin .
S3 :	Tell me more.
S2 :	We enjoy (メモを見る) roller coaster . It's fun! Uh…How about you?
S3 :	I went to Nagaoka and enjoyed shopping.
S2 :	Oh, nice!

2回目の会話では、時制の誤りはあるものの、1回目の段階では分からなかった単語を使いながら会話をするS2の姿が見られた。

Small Talk後、S2は「分からなかった英単語を知ることができてよかった。2回目の会話では、言いたかった英文が言えるようになってうれしかった」と振り返っている。このことから、英語が苦手な生徒でも、情報機器を使って1回目の会話で分からなかった単語や表現を調べた後、2回目の会話に臨むことで、「話すこと [やり取り]」に対する喜びや達成感に繋がっていることが分かる。また、2回目の会話がスムーズになることで時間が余ったため、“How about you?”とS3に質問を振って会話を広げることにもつながったと考える。

(2) 実践例2 Topic: あなたを幸せにするものは何? (“What makes you happy?”)

【1回目】

S4 :	What makes you happy?
S5 :	Watch TV makes me happy.
S4 :	Nice. What TV?
S5 :	Uh…(テレビ番組名)!
S4 :	I like it too. …
S5 :	How about you?
S4 :	Uh…read manga makes me happy.

S4とS5ともに主語を動名詞にしておらず、文法的に誤っている文を話していた。これらの生徒以外にも同じような誤りが聞かれたため、全体に指導した(図2参照)。また、机間指導から発見した“Tell me more.”や“For example?”(大場, 2024)などの会話を広げる表現も全体で再確認した(図3参照)。

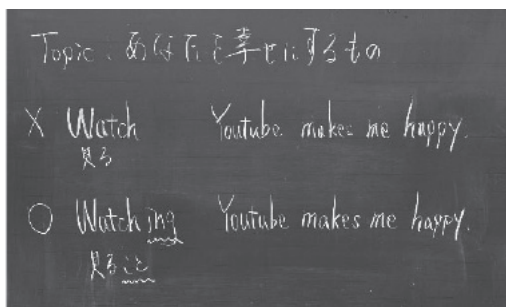


図2 板書例①

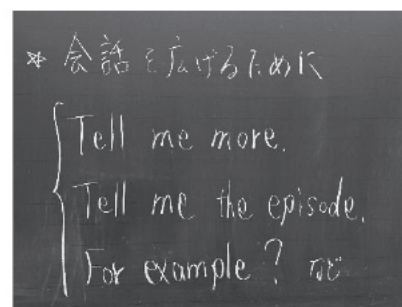


図3 板書例②

【2回目】

S6 :	What makes you happy?
S5 :	Watching TV makes me happy.
S6 :	For example?
S5 :	I like (テレビ番組名).
S6 :	Me too.
S5 :	How about you?
S6 :	Watching Youtube makes me happy.

S5 :	Tell me more.
S6 :	I watch (芸能人の名前). He is a comedian . He is funny.

S5とS6ともに、主語を動名詞にすることで、正しい文を話すことができています。また、“Tell me more.”や“For example?”を使うことで、単調な会話ではなくなっている。振り返りシートのメモ欄を見ると、S6は1回目の会話で「芸能人」という単語が分からなかったようだが、情報機器を使って調べることで、2回目の会話では解消できていた。

Small Talk後、S5は「主語をing形にしていなかったもので、これからは気をつけたい。また、次回は“Especially”などを使って自分が話した内容を膨らませながら、会話を続けたい」と振り返っている。このことから、内容面だけでなく、正確さにも意識を向ける助言をすることで、生徒は自らの課題に気づくことができると考える。また、これらをメモすることで、生徒はその修正された知識・技能を今後のSmall Talkで活かすことができると考える。

(3) 実践例3 Topic：新潟県のおすすめスポットは？ (“Where should I visit in Niigata?”)

このTopicは9月から新たに当校に赴任したALTに新潟県のおすすめのスポットを紹介するといったパフォーマンステストに向けて設定したもので、一方の生徒がALTになりきって会話をを行った。

【1回目 (S7がALT役, S8が生徒役)】

S7 :	Where should I visit in Niigata?
S8 :	Sado!
S7 :	Tell me more.
S8 :	It's a…世界遺産！
S7 :	Really? What can do?
S8 :	Uh…goldをゲットできる！あとIt's beautiful. 景色がbeautiful.
S7 :	OK. Anything else?
S8 :	You can see Toki! Uh…珍しい！ (この後、S7とS8の役割を入れ替えて会話をを行ったが、ここでは割愛する。)

Topicが難しいということもあったが、S8は日本語を多用してしまい、ALT役の生徒に佐渡の魅力を伝えることができなかった。この後、ALT役の生徒からアドバイスをもらう時間や、個人で情報機器を使う時間を設定した。また、2回目の会話も例外的に1回目と同じ相手と行った。

【2回目 (S7がALT役, S8が生徒役)】

S7 :	Where should I visit in Niigata?
S8 :	Sado!
S7 :	Tell me more.
S8 :	It's a (メモを見る) World へり…テジ site .
S7 :	Really?
S8 :	And get gold!
S7 :	Nice!
S8 :	You can see Toki. Rare bird ! (この後、S7とS8の役割を入れ替えて会話をを行ったが、ここでは割愛する。)

文法はやや不正確であったが、S8の語彙の幅が確実に広がっていることが分かる。また、情報機器で発音を確認することができたため、“heritage”のような未習語でもなんとか自分で発音することができた。このように、S8は「個別最適な学び」を取り入れたSmall Talkで練習を重ねることで、会話の内容が高度になっていく様子が見受けられた。

Small Talk後、S8は「あいまいだった表現を確認することができてよかった。もっと単語や表現の幅を広げたい。また、相手が自分には言えなかった表現を言っていてすごいと思った。次は真似したい。」と振り返っている。この記述から、会話をさらに高度なものにしようと、相手が使った表現を取り入れようとするなど、仲間と協働しながら学びを深めようとする態度も見取ることができる。

このTopicでのSmall Talkは、自身での振り返りやペアでのフィードバックを重ねながら、パフォーマンステスト当日まで継続的に行った。回数を重ねることで、会話の内容が高度になっていく様子が見られた。以下に、パフォーマンス

テスト直前に行ったSmall Talkの内容を示す。

【パフォーマンステスト直前の内容（S7がALT役，S8が生徒役）】

S7：	Where should I visit in Niigata?
S8：	I recommend Sado!
S7：	Really? Tell me more.
S8：	It's a world heritage site.
S7：	Really? What can I do there?
S8：	You can get gold. And you can see beautiful scenery.
S7：	Nice!
S8：	You can see Toki. It's a rare bird. Please visit Sado.

S8は相手が使っていた「おすすめする」という意味の“recommend”なども取り入れたり、主語を明確にしたりして会話の内容を高度なものとしていた。また、ALTにその場所をよりアピールするためにはどうすればよいかを考えさせた結果、最後に“Please visit Sado.”と、相手意識のある発話もしていた。

また、以下は、実践例では取り上げていない生徒が書いたSmall Talkの振り返りの記述の抜粋である。

表1 生徒の振り返りの記述①（原文のママ）

- ・1回目はあまり会話できなかったけど、2回目は質問などをしながら会話を広げることができた。
- ・分からなかった単語が2回目の会話で言えたのがとてもうれしかったです。次も頑張ります。
- ・合っているか分からないけど言えてよかった。恐れずに言うことは大切。
- ・言いたかったのに言えなかった言葉を知ることができてスッキリしました。
- ・Small Talkは嫌いだったけど、言いたいことが言えるようになると楽しい。
- ・自分が言いたいことを相手が理解してくれてうれしかった。
- ・相手について初めて知る情報もあって、今までで一番楽しいSmall Talkになった。
- ・2回目の会話では「誰と?」とか「いつ?」など、質問をして会話を広げることができた。
- ・2回目の会話では、笑顔で話すことも心掛け、気持ちも表現できた。
- ・2回目の会話では、3年生で習った文法表現を使ってみようと心掛けた。

以上のように、これまでSmall Talkに苦手意識をもっていた生徒も「楽しい」と書いていたことから「個別最適な学び」がSmall Talkへの意欲を喚起していることも分かる。また、英語を得意とし、調べる単語や文法がないという生徒も「より高度な会話を実現しよう」などと助言をすることで、2回目の会話の内容を3年生で学習した文法で表現しようとする姿があった。

また、以下のような記述も見られた。

表2 生徒の振り返りの記述②（原文のママ）

- ・過去形にしなくてはいけないのに、忘れていた。次は気をつけたい。
- ・今回は相づちを打つなどして会話が広がらなかったから次はそこを意識したい。
- ・次は質問をもっと意識したい。難しい表現も実際に使ってマスターしたい。
- ・時間いっぱい話したい。そのために相手に質問することを意識したい。
- ・日本語を使ってしまった。次までに何と表現するか調べておきたい。
- ・言いたいことをとっさに言えるように練習を重ねていきたい。

表3 生徒の振り返りの記述③（原文のママ）

- ・回を重ねるごとに、即興で質問することができている気がする。
- ・前よりもすらすらとスムーズに話すことができた。
- ・前よりもたくさん話すことができた気がする。
- ・だんだんと言葉がすっと出てくるようになり、今日はいつもより長く会話をすることができた。

表2の記述にもある通り、自身での振り返りやペアでのフィードバックを経て、自分の課題に気づき、次につなげようとすることで、自らの学習に関する自己調整を行いながら、粘り強く学習に取り組む姿も見取ることができる。また、表3の記述から「個別最適な学び」で得た知識・技能を記録しながらSmall Talkを重ねることで、「話すこと [やり取り]」の力が向上したと実感する生徒もいた。

5 結論と今後の課題

上記の3つの実践例から、Small Talkの中間指導で情報機器を使うことで、生徒は2回目の会話で確実な成長を感じ、結果的に「話すこと [やり取り]」に対する意欲や達成感に繋がっていることが分かった。また、教師が会話の内容面だけでなく、正確さにも意識を向けさせる助言をすることで、生徒は自らの文法上の課題に気づくことができた。そして、誤りを修正したものを2回目の会話や今後の会話でアウトプットすることで、それらを定着させることができると考える。また、相手が使った良い表現は自分のものにしようとするなど、仲間と協働しながら学びを深めようとする姿も見られた。

このような生徒の姿やその他の生徒の振り返りの記述から、中間指導において、情報機器を活用したり、適切な助言をしたりすることで「個別最適な学び」が充実し、結果的に質の高いSmall Talkにつながると言えるだろう。

令和5年度全国学力・学習状況調査報告書（国立教育政策研究所，2023）によると、「話すこと [やり取り]」の指導改善のポイントとして「文法事項の形式や意味の理解に加え、どのような場面で使用できるのかを理解し、実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けることが重要である。指導に当たっては、内容の伝達に重点を置きながらも、生徒が自ら発した表現を書き出して修正点を考えたり、教師がフィードバックを与えたりするなどして、正確さに意識を向けることが求められる。」とある。本研究では、この記述に基づき実践を重ね、中間指導の際に情報機器を使うことで「個別最適な学び」の充実につながり、結果的に質の高いSmall Talkにつながると結論付けた。しかし、情報機器は便利な一方で、頼りすぎてしまうことで生徒の思考力・判断力・表現力の育成を妨げてしまうことにもつながりかねないので、使用頻度には留意したい。

また、Small Talkを行う相手によって、そもそも発話をしようとしないうちも一定数見られた。今後は学級経営や英語教育を通じて、生徒がどんな相手とも学べるような安心・安全な環境づくりに取り組んでいくとともに、仲間とコミュニケーションをとる大切さを実感できるような取組を実践していきたい。

6 参考文献

- 文部科学省. (2017). 『平成29年度英語教育改善のための英語力調査（中学3年生）』
- 文部科学省. (2018). 『中学校学習指導要領（平成29年告示）』
- 文部科学省. (2021). 『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）』 https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf
- 大場浩正. (2024). 『中学校教員対象英語講座研修資料』 柏崎市教育委員会主催
- 国立教育政策研究所. (2023). 『令和5年度全国学力・学習状況調査報告書』